



生後三〜六カ月の教育がイヌの「人生」を分ける

大型犬の場合、子犬は一匹、最低でも二十五万円前後。エサは、生肉が好きなものもいるがドッグフードを一日一回、蚊のシーズンにはフィリアの薬を月に一回。生後三カ月くらいから、月六万円前後の費用で四カ月ほど訓練をすることが望ましい。帰ってきて絶対に欠かせないのが朝晩、最低でも三十分の散歩。排便の量も体の大きさに比例して多い。

もちろん、クラーフは必需品

だ。特にハスキーにとって日本の夏は、ほとんど昼間は動けないほどつらいものらしい。

はるか昔、ハスキーはロシアでソリを引っ張ることしか考えていなかったし、ゴールデンもラブラドルも、スコットランドやカナダで水鳥を追っていた。もともとは人間の仕事仲間のイヌだ。外見も、ゴールデンはもともと尻尾が細くて目がきつく、毛もほとんどないようなイヌだった。それが改良を重ねて、やっと仕事以外で人間の要求にもこたえる「賢質」を備えるようになった。

前出の佐藤美津子さんは、「けれど、いくら改良されていて大型犬の場合、根本的な気質は消えません。それをムリに人間に合わせることになる。それならその特徴にそって最低限のルールを教えてやらないと、手に負えなくなってイヌが不幸なんです」

特にハスキーは、体罰をするとうみつくような攻撃性が出たり、もともとこの性質でやたら引っ張るために人間がついていけない、散歩をしなくなってしまうストレスがたまるケースがある。町田市の獣医、青木貢一さんという。

「二度噛みついて相手がひるむの

を覚えると、繰り返すようになりまずからね。相当きちんとしたしつけをしないと、これから事故発生率ナンバーワンの犬種です」

というわけで最近は各地で、飼い主が自分でしつけるための教室が増えている。青木さんも週に一度、教室を持っているのだが、「とにかく叱れない、ほめられない、なのに叩いたり、力で押さえようという飼い主が多い。『ほめてあげてください』という『よしよし』で、終わり。初めにびしっとしつけて、あとは主人として人間の言葉でほめてあげることが大切なんです。イヌにはわからないと思ってる。何度注意してもなかなか言葉が出ないんです」

捨てられたドーベルマンの哀れ

イヌの訓練よりも、人間の訓練のほうが先なのだ。

それだけ面倒を見てあげても、環境が悪いばかりに不幸になるケースもある。麻布十番の獣医、宮野のり子さんは、

「マンションで内証で飼う人が多から、散歩も人目につかない夜遅くか、夜明け前でしょう。当

然、時間は足りないし、昼間も動けない。どれだけきちんと散歩させても、一歳すぎから原因不明のまま足が曲がってくる子が、最近多いんです。結局、かわいそうだと郊外の家へあげてしまうケースがありますね」

五月五日、千葉・成田の東急インのロビーにドーベルマンが入り込んでしまった。通報を受けた千葉県動物愛護センターの職員が駆けつけると、首には数珠が巻いてあり、エサが入っていたと思われる袋をぶらさげていたという。

「明らかに捨て犬です。ちゃんと訓練されていたからいいけれど、空腹で凶暴にでもなったら大変でしたよ。大きな犬は、映画などで人気の種類以外は、基本的に愛好家が飼うので不幸なケースも少ないはずなんです……」（福永優・同センター業務課長）

結局、このドーベルマンは引き取り手もみつからないまま、処分されてしまった。

もちろん、役に立つケースもある。東京・渋谷のコンピュータソフト会社、日本オラクルでは毎

週木曜日、オールド・イングリッシュ・シープドッグが「出勤」してくる。社員証をかけ、オフィス

を歩き回る。社員は気が向くと頭をなでたり話しかけたりする。

「自然に触れることで創造性を高めよう」とペットショップから月三千万円で借りています。吠えない、臭わない、走り回らないという点で選んだんですが、いるだけでほっとする、ストレス解消になると好評ですよ」（業務部・佐藤芳男さん）

とはいえ人気がありすぎて、「お客様がそちらばかり気にして困る」

と営業部からクレームがつき、出勤は週一日に限られている。

前出の青木さんはいう。

「日本ではいまも、大きなイヌと見るとたて怖がる大人が多い。大きなイヌが増えることで、イヌがペットから家族、さらに社会の財産だという意識が変わっていけばいいんですがね」

ロンドンの中心部でドッグショーが開かれるときには、大型犬が地下鉄やタクシーに続々と乗り込んで集まってくるという。乗客はだれも気にとめないらしい。

さて、山手線にハスキーやゴールデンが当たり前顔で乗る日は――当然、こないだろうなあ。